

齋藤さんとお会いしたのは、去年春の桜もそろそろみおさめのころである。「どうしてもあなたに会ってお願いしたいカナダの彫刻家がいるね」

という現代彫刻センターの飯野毅さんの紹介であった。これまでも多くの興味深い彫刻家や外国のキュレーターたちとの出会いの場を設営してくれた飯野さんの、「どうしても」の一言が気になって、一夕、氏の自宅を訪ねることにしたのである。

電話の話だと「カナダで牧場を営み、彫刻をつくっているはくの古い友人サトシ・サイトウ」ということであった。わたしは、てっきり髭をたくわえた丸太のような腕をもつゴツイ彫刻家を想像したのであるが、当の齋藤さんは正反対の、もの静かでやさしい様子である。ちょっと大学教授かな、といった風体であった。わたしは、ほっとした。なぜか知らないが、急に親しく思えた。

先年亡くなられた飯野さんの母堂治さんのご仏前に手を合わせ、拙文の英訳でしばしば夜中に電話でやりとりしたことを思い出し、そしてわたしは人と人との出会いがもたらす不思議と、時の経過によって甦る光景を想像した。古い友人によって繰られる記憶のアルバムも、しばしば、自分が心にとどめていた光景とちがっている。

齋藤さんと飯野さんの話もどこかでズレたりしていて、ちょっとおかしかったが、微笑ましい光景でもあった。

齋藤さんと飯野さんには、同学年の共通の友人が多く、それぞれの道で一家をなしている。60年安保闘争の時期を同じ慶應義塾のキャンパスで過ごした仲間たちが、その後30年を経て、それぞれの人生を生きている。

いくつかの岐路と選択。齋藤さんは「計量経済学」を専攻したという。1961年にカナダの奨学金をえて留学。きっと優秀な学生だったのにちがいない。モントリオールのマギル大学で過ごした日々の暮らしは知らないけれども、こうして彫刻家となってしまった齋藤さんを見ると、何か転機のきっかけを知りたく思う。ふつうならば、学者の道を進んでいてもおかしくはない。しかし、そうならなかった。

おそらく、齋藤さんの心のうちに生じた変化に、齋藤さんは自ら応じたのだろうと思う。60年代にふきあれた「カウンター・カルチャ」（対抗文化）の余波が、ケベックにあった齋藤さんを変えたのかも知れない、というふうにはわたしはとらえたいけれども、何か「大いなる幻影」に誘われたのかもしれない。

気障ないいかたになるかもしれないが、詩と結びついた「創造」という名の魔性に引かれたのであろう。カナダの湖を前にして、詩人西脇順三郎のことを想っていた——というのともわかるような気がした。慶應義塾の大先輩で、経済を専攻した詩人に、自己をうつす鏡を想定したとしても不思議ではないからである。

モントリオールから東方160キロのリゾート地ノース・ハトレイ。そこに齋藤さんはモントリオール生まれの女性ルイズ・ドゥセさんと居を定める。孤独を手渡す相手に恵まれたのである。

2年前にシャープブルック美術館で開催された二人の回顧展のカタログをみせられて知ったのだが、齋藤さんの転機と新しい出発となったもののひとつが陶芸の世界であった。友人のところでまねごとをしているうちに深みにはまったという。

しかし、ここからいかに齋藤さんらしい。何事も徹底するたちの、そして「大いなる幻影」のなかにそれを眺めようとする齋藤さんを見ることになるからである。

齋藤さんのなかに目ざめた「土」との出会い、その後1年9ヶ月、日本に二人で滞在する

ことによって、いっそう親密なものとなった。「サイトウ・サトシとルイズ・ドゥセ・サイトウの芸術世界に深く根をおろしているのは芸術的冒険に邁進し、なみはずれた美的体験を懸命に積み重ねているということである」とシャープルック美術館長は書いている。ドゥセさんは79年に伊勢丹美術館で個展、齋藤さんは85年に「陶土の観念」という高評を博した個展をトロントのコッフレア画廊で開催。二人の協働は、芸術的な世界だけではなく、5万5千平方メートルの牧場の作業にも及んでいる。

こうなるまでの齋藤さんが、心を寄せて親交した日本の作家たちのなかに、島岡達三氏をはじめ辻清明氏、亡くなられた加守田章二氏などがある。尋ねる勇気のある人だ。人と人とが縁を結ぶことによって、自己を越える世界の意味を知ることができるからである。

わたしをもっとも喜ばせたのは、83年に制作された御影石の彫刻(「無題」)の写真をみたことである。齋藤さんの心にかたちのさわやかさを感じた。移民たちのなかにまじわって生活する齋藤さんの、人間を大切にす感情が、ほとよく調整されているからである。

*

この一文は、*カナダからやってきた彫刻家・齋藤智さん*の「大いなる幻影」と題して『三田評論』(1991年7月号)に載せたものに、若干、手を加えたものである。

その後、どうしておられるかを気にしていたのであるが、こんど個展をするというので、せんだって作品写真がとどけられた。御影石(白、黒、シャンペイン)を使った彫刻はダイナミックな構造とさわやかな印象を誘うフォルムをもっている。齋藤さんのポエジーとカナダの大地との親和を物語っているようである。

*

ようやく齋藤さんの作品に接する機会をもった。わたしは何年かぶりに会う友人との再会のように、心のときめきを抑えることができなかつた。虚心に作品に接することが必要だとわかつてはいても、何か熱い感情がそれをばばんでいた。

個展の初日のオープニング・パーティーで齋藤さんは古い友人・知人のあいだを忙しくあいさつしてまわっていた。わたしは「おめでとう」という短いことばを交わし、作品をみたあと個展の会場を出た。

こうした出会いが、感傷的に過ぎる、というのであれば、はたして人間的な共感をどこに求めたらよいのかを迷う。人間的な共感が作品との出会いのきっかけをつくり、作品がその人間的な共感を越えて感動を引き出すからである。いい作品だ——という印象は、批評のみきわめを避けた言辭であるが、わたしは素直にそう思った。俗受けを嫌った作品の様子が、そのことを示していたからである。

個展にはすべて石を素材にした新作10点が展示されていた。そのなかで、もっとも興味深いと思ったのが、「春の萌」である。三つの石を積み上げ、ちょっとユーモラスなかたちで、どの角度から眺めても異なる表情をもっている。石と石との接点がどうなっているのだろうと考えたが、不安定ななかの安定、あるいは石同志を眼のなかで回転させてほしいといったげの様子なのである。わたしは咄嗟に、このあたりで作家がノミを加える手を止めないと、石を壊してしまうと感ずて手離した作品ではないかと思った。そして何か遠い記憶が、この作品に宿っているような気がした。齋藤さんの心のなかの、轆轤を回す姿を想像したせいである。

齋藤さんの人生におけるいくつかの転機が(あくまでも推測の域を出るものではないが)、詩と結びつく「創造」という名の魔性の引き合いのなかにあったのだとすれば、石との接触もまた、あらたなる出発を告げるものだったはずである。

会期の合間にルイズさんとつれだって、齋藤さんは九州と四国を旅行されたようである。四国では牟礼(高松)のイサム・ノグチの仕事場を訪れたときいた。わたしは齋藤さんが、カナダにもどって、カナダの自然のなかで齋藤さん自身が「彫刻とは何か」を問い続けることになるだろうと思った。

(神奈川県立近代美術館館長)